

『ピレネー犬の動物文化学Ⅰ』

LIBRARY ICHIKO 137 WINTER 2018 1月31日 発売予定

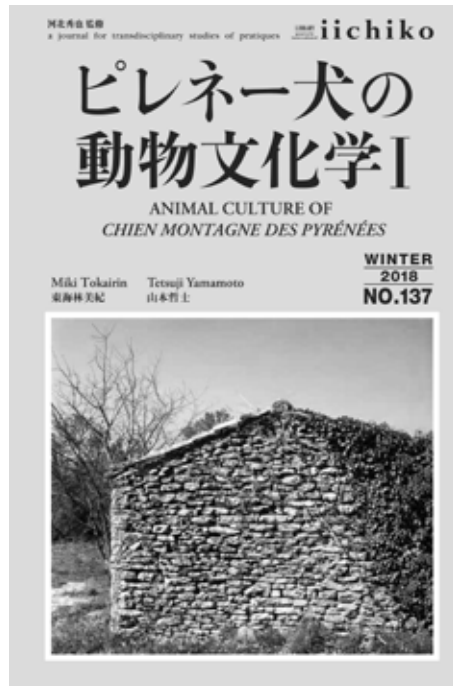
ピレネー山脈の中の、壮大なピレネー犬の実録取材の写真集である。人間と動物を対立させて人間性を説く論法は、動物を野獣とみなし、その野獣性からの離脱に人間の出現をみなすしかたではないが、人間を動物に比して同質のように説くしかたもある。家畜化された動物だけでは、野生の動物も、人の暮らしに役立つに説くしかたも、食や衣服さらには住居にまで使われてきた。共存、敵対、殺傷、攻撃など、その相互関係の長い歴史および現在が見直されるべき次元に、人類は生きていく。森から動物たちが都市へ迷い出て、農作物を荒らし、また危険だと追い、回される現在だ。

動物と人の共存は、今や、都市化された世界ではペットとなっているが、人間の生存にとって動物の歴史と存在は不可避の関係にある。わたし自身の愛犬ピレネー犬の2代目が腫瘍で2匹とも亡くなってしまうとき、あまりの哀しみに、その故郷のピレネー山脈まで足を運んでルーツを見たいと、何の手がかりもなく探し当てた、その放牧の壮大な光景は、百匹を超えるであろう羊の群れをピレネー犬たちが、人の命令なしに自分たちだけで先導し、引き連れて、山を降りて、羊たちに牧草を食べさせ、その間、のんびりと過ごし、水浴びまでしながら、そして、羊たちを連れて山へ登って帰る現場であった。その感動から、どうしても、もつとしっかりとその生息・実態を知りたいと思っていたところ、写真家の東海林美紀氏が関心を抱いてくださり、調査を兼ねての現場での実録を撮ってくださいました。ほとんど手がかりがない状態を、氏は一つ一つ追っていきながら、その真つ只中に入って、貴重な記録を掴んでくれた。数千枚の記録は、本号だけに収まるものではないゆえ、今回はピレネー犬を主にし、次回はそれとともに関係している方々を主に放牧文化が持続されている現状を伝えていきたい。

何百種もいる犬種の中で、警護犬も数々いるが、ピレネー犬は、羊たちの中で生き暮らしている極めて稀な存在であり、危険な動物と人の側との間に入って、羊・人を守る。そのけなげなあり様の動物文化は、人や生存文化がいかなるものであるのかも照射してくれる。それは、数千年の歴史がある。生態系が、産業化の中で破壊されていく現代で、かすかに残されたヨーロッパの放牧文化であるが、このおとなしい力のある大型ピレネー犬のあり方は、貴重な世界であり、感動的である。

本誌では、初めての写真集特集の形式にした。ペット犬とは違って、泥だらけになりながら、彼らは人間への約束をしっかりとしつかりと守り続け、羊たちを家族として、羊たちからも信頼され、熊や泥棒たちから、自らの力と意志で守っている。生まれたばかりの愛らしい子犬たちは、人の手から離されて羊たちの群れの中で成長して、偉大なる「パトウーPatou」になっていく。感動的な生の姿を味わっていただきたい。偉大なる動物たちに感謝！ という姿勢で、動物文化を考え、人間のあり方を考えていきたい。

▼東海林美紀「ピレネー山脈の放牧文化とピレネー犬Ⅰ」 ▼山本哲士「動物哲学と動物の文化学へⅠ」 ▼カラー特集「ピレネー山脈の放牧文化とピレネー犬」



A5 変形 128頁 定価(本体 1,500円+税)

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。
日本ベリエールアートセンター主宰。
著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、
『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』
『フーコー国家論』ほか多数。

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com ehescbook.com

ご注文は「RICK」 → Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

ピレネー犬の動物文化学Ⅰ

LIBRARY ICHIKO 137 WINTER 2018 1,500円(税別)

ISBN 978-4-938710-32-3 C1010 ¥1500円

貴店名

部数

冊